



ただ『恋人』と

ポコロポコ璃桜

サンドローネ × コロンビーナ（サンビナ、ビナサン両方心の内に飼っていますが、今回はサンコロ支援です）の二次創作同人誌です。

● 現時点では全年齢ですが、完全版はNEW注意（飲酒後一人で＋サンドローネ新生後の初夜）。文字数は七万文字を少し超える程度を想定しています。三分の一の内容を収録している今回の試し読み版の長さで二万三千文字程度です。前を向きながら後ろに行こうとするビナが、家具を集める話（試し読みの範囲では家具集めまでは辿り着けていません）。

※ サンドローネの事を諸般の事情で初登場時から注視していた為、あえてフォンテーヌ世界任務は彼女の正式な登場まで初見を残していました。その都合、Luna2からLuna4実装までの三ヶ月近く、座学のみで水仙十字世界任務及び二人の情報調査を行い、フォンテーヌの世界任務はLuna4三日前に読了した流れとなっております。まだまだフォンテーヌ世界任務に関してのツメが甘いところはあるかと思えますので、精進してまいります。

※ あくまで予測ですが、完成版では空月の歌の終盤のネタバレに近いものが含まれている可能性があります。

大いなる秘技の名に相応しい本物の『恋人』を描いてくれた推し会社のmiHoYoに感謝を込めて

01 特別な一雫

やっと、見つけた。ベッド、もうすぐ、あといくらか歩いて目を開けば視界に入れることができる。静かな流水の心地よさを時折足の裏で感じながら、一呼吸するだけで肺いっぱい水元素が流れ込んできそうな空気に心臓を任せながら。暗い遺跡の奥底。ここにあったんだ、後はこの不思議な鏡を通るだけ。なぞなぞをたくさん解いたよ、サンドローネ。

何時も相いれず、一瞬で生まれ、永遠の眠りに付き添い、離れることなく――烈火も燃やせぬもの。太陽も燃やせないティワツトの影、どれだけ暗い夜が来ても。女神の私が、キミを照らすから。

現世の至宝。愛を込めて、キミの名前を何度だって呼ぶよ。

原初の一滴。月の裏側のクーヴァキの海からキミに一雫を、あげる。別に、とある廃墟に芽吹く新しい命をキミの一滴にしてもいいよ、果実から絵の具を作るみたいに。

そして、私がずっと探してた――ここは。

落ちる。もう少しで届きそうだったのに、まぶたの外で世界が崩れていくのが分かる。キミのベッド、欲しかったな。そっか、歩いてた場所は夢の中だったんだね。肩を抱きかかえて、つむるまぶたをもう少しぎゅっとする。きつと、今がひどく寒いだけなんだ。だって、冬だもの。もうすこし、もうすこし耐えればきつと、冷たくなる。

薄氷は溶けて、雪解けの清水が待ちわびた草木に流れてゆく。まどろみからさめた寝起きのコップの一杯みたいに心地よく土が吸っていつて、花にも染み渡る。

根が吸いあげて摂り込むみたいに。葉が光を浴びるみたいに。おもてを上に向けると鼻先でくすぐったく受粉するみたいに。私にそうやって全身から三月の力が流れ込んだみたいに。きつとキミの中でもね？カップの

水面をスプーンでゆっくりと掻き混ぜて対流を起こすみたいに、掻き混ぜられて溶け合っていく。

新生の前、私がまどろみの中で水面の中に眠ってた時と今は同じだよな？月光が川になって降り注いで、受け皿に溜まって銀の雫に、なっていたみたい。まずたんぽぽが咲きほこる季節が来て、綿毛になるころには…キミのくれた綺麗な向日葵が咲いて。その頃には起きてほしいな。みたい…キミが見たい…サンドローネ。

いた…っ。気付いたらなにかに手を伸ばしてたからかな。いつもの寝場所から、落っこちちゃった。胃は…相変わらず、調子は良くないね。目が灼けてるみたい。喉が…歌えなくなっちゃう。歌えないのは…困るな、サンドローネを起こさないといけないのに。クーヴァキは歌声と一緒にのうがよく響くんだよ、サンドローネ。痛い、なんて言ったけど、つい反射で口から出ただけだよ。

「ただいま、サンドローネ」

夢から帰ってきたから。月霊以外誰も居ない部屋で、声が何かを留めたいみたいに残響した気がした。それでも、毎日言ってしまう。ここまでくると、もう、サンドローネに「ただいま」が言いたいだけなんだと思う。

ティワットに拒絶なんかされてないのに、傷口から溢れるなにかがとまらないんだ。独りで心細かった時に、最初に出会えた家は…キミだったのに。私が切望してた「家」はずっとキミとの間にあったのに。サンドローネがいることが当たり前のものだって、思い込んでた。私が苦しかった時に、痛みを和らげてくれたのはサンドローネだった…キミの声が聞こえない世界はこんなに寂しいものだったんだね。苦しいよ。溢れてくるなにかの傷口を、そっとふさいでくれるキミがいないんだもん。

「ねえ。何も分かってない時、キミに出会えてたのは…」

幸か、不幸かって続けようとして、やめる。私たちは、幸運だったよね。最近ね…キミを参考にしてみた

物語だったけど……どう遊ぶのか、キミに教えてほしかった。キャスリングだっけ……？ダンスみたいに一緒に場所を入れ替わって、あの物語でボーンのリディールが私と同じ白のクイーンになる場面なんか、現実でも見てみたかった。メイトって同僚だけじゃなくって、つがいの意味もあるなんて知った時は……いいなって想いながら、想像しちゃった。だって、同僚で家族ってことだもんね？

「月、行つてよやかな」

ねえ、こうやって思い出を頭に思い浮かべるとね、行きたくなる場所がでちゃった。今はもう、簡単に行くことができるし。

最近銀月の庭を離れるときはね、ちゃんと書き置きを残すようにしたから。すぐ目の前でもお留守番してくれてる記録が好きな月霊の子のところに行つて、紙をもらつてよう。いつもキミはいてくれるもんね。自分の家だから、距離は何も考えなくてももちろん分かる。大きくたった六歩、足を踏み出せばたどり着ける距離だからね。別にクーヴァキの反射なんかに頼らなくても、元素視覚を使わなくても。皆が言いそうな言葉選びをするなら、「目を瞑っていたってたどり着ける」かな？

ペンを借りて、インクに含まれてるちいさな元素の粒に思いを馳せながら……「月に行つてくるね。」って、一言書き記して、いつも私が座つてる場所に置いておく。今はこんなにも月が近いんだから、もっと遠い場所に行けるように、行つたことがない場所に行けるように、慣れておかないと。

月のトンネルを通るのが好きなんだ。私が作つたから祈月の花があちこちに咲いていて、夜の帳の中で歌う旋律が……穏やかな川の支流みたいに、宙に流れてる。その果ての、月に向かって流れる大海を見てキミはどんな声を聴かせてくれるのかな。最近ね、人の波に紛れてみるようになって、本をもらつて。あんまり過激なのはま

ただ『恋人』と

だなんだけれど、形を持っていない感情を表現してみたくて、ちょっとだけ色んな感情を勉強したんだ。

……私、キミにキスをしてみたかった。魔法の友達に教えてもらった歌をすこし好みに変えて、口ずさんでみる。

ねえ。月にキミを、連れ出したいよ。星をわたってあそびたい。月で……海はどんなふうか見せてあげたい。つまりね。言いたいのは……私と手を繋いでほしい。言いたいのは……サンドローネ、私にキスをして。キミの心を歌で満たしてあげるから、この先も永遠に、一緒に歌ってほしい。キミが私の待ち望んでた全てなんだよ。言葉を重ねるなら……本当の存在になってほしい。もっと言葉を重ねるなら……愛してる。

別に足先に力をちよつと込めれば、あの岸まであつという間にたどり着くんだけれど……ちよつと軽いくらいの足取りで。規則的な間隔で、天井から雨垂れをしたたらせるような速さで、進んでいく。皆とはテイワツトで……会えるもんね。この通り道には障害物なんてなにもないから、元素視覚なんか頼らずにただ、駆けるだけでよかつた。なびく髪と頬に挨拶をしていく風が心地よかつた。

やがて、それから……特に意識もしていない元素視覚が、夜空の天幕に何も感じられなくなったところで。つまり重ねて言うなら、元素の残り香もない、キミの場所です。そつと、立ち止まる。こないだ、約束通り旅人を連れて行った時は……ゆっくり、立ち止まらなかったから。根を下ろすみたいに脚を崩してから、膝を抱えて座って。そつとまぶたの上のアイマスクを外して、目を開いた。だってここじゃ、元素資格もクローヴァキも、私にとっては何の役にも立たないもの。誰に背を向ける必要も今はないから、今くらい……気持ちをこぼしても、いいよね。

「サンドローネ……」

視界が一瞬で——明るくなる。目を瞑ってる時でも時々ある、急にまばゆい閃光をまぶたに感じるような勢

いで、横に大きくひらけていく。奇械公がいて、ブロンニアがいて、そして……産まればかりの愛おしいサンドローネが、視える。何度も覗いたけど、何度覗いたって……キミは、可愛いね。覚えてるよ、普段は……クーヴァキの反射を使ってキミを感じてたけど。キミの瞳の色は綺麗な「青」で、たまに顔の近くで強くクーヴァキを出し過ぎたら……ほら、青は光を吸収しやすいから。私のクーヴァキをかかえて零さなくて、クーヴァキで周りを見る私からは……乱反射して、瞼越しでも万華鏡みたいに輝いてた。でもね。そんなことで満足せずに一度くらい、一緒にいる間に目を開いてればよかったなって、今は思う。

「もう一度……キミと、話がしたい」

ここに来る度に、言ってるね。でも、覗てるばかりじゃ寂しいんだもの。話がしたいの。恋人のアルカナに直面した瞬間から、うつすらと思ってたんだ。意味を詳しく聞いてみたけど……全部全部、私達のことみたい。ニコさんから貰ったんだけど、異邦にはロミオとジュリエットなんて作品があるらしくって。数ある悲恋の中でもそれほど痛ましいものはないんだって。「バラはバラの名でなくなったとしても、香りを失ったりしない」、だとか。『あなたの身体のどこでもない、名前と家を捨てて』の物語、だとか。私は……そのくだりはよく、分からないな。名前はとも大切なものだと思うから。家も、大切なものだと思うから。でも、本質は変わらないっていうのは……わかるよ。

ねえ、サンドローネ。ジュリエットがね、仮死毒で眠っちゃうんだって。それをみたロミオが、毒薬を飲んで死んじゃうの。そして、起きたジュリエットが亡くなったロミオを見て……本当に死んじゃう。嫌な夢みたいだよ。ね。順番まで、今の私とキミそのものなんでも。毒薬だなんて、あの「博士」がお似合いで。

でも、その物語では、生きた死んだはそこでおしまいなの。キミが私の新生の意思を受け止めて実現してくれたから、その輪廻の先に今、私達はいるんだよ。

「――『死』さえも我らを分かťことは……」

……サンドローネ。ちよつとくらい、いいよね？ここには今、誰もいないから。キミの記憶と二人つきりだから。ごめんね、弱くつて。ほんとは今を生きる私が、サンドローネが休んでる分しつかりしないといけないのでもね、私、サンドローネに褒めてほしかつたんだ。ドットーレのこと、倒せたよ。旅人との約束も守つて、月に連れてきたよ。皆に心配掛けないように、お別れも頑張つたよ。サンドローネ、私……ただ仕返しで返つてくるのが遅れてるだけなら、もう、いいから。

「話したい、もう一度……キミと、話したい」

それが全てだつた。キミと初めて出会うまでに知り合つていた、私の心を何も知らない隣人達だつたなら……どれだけ丁重に扱うか分からない雫は、触れられないキミの代わりに、ここに来る度、そつと上から下へ、撫でくれる。キミの記憶を見つめていられるここに流して、一番綺麗な祈月の花を咲かせようと思う。私からキミへだけの、特別な一雫。こつやつてキミを見る度に、今は情けなく流しちゃうけれど。きつといつか、キミと月へ遊びに行く時に……何も知らずに綺麗な花だけを見てくれたら、それでいいから。

じんじんするまであの場所ですつてたから、クゝアキの斥力と引力を使つて……ズルをして。一步も歩かずに月にたどり着く。旅人の宇宙船をいつもみたいに借り、私の大好きな「家」があるテイワツトを静かに見つめる。もちろん、目を開けてね。

そうしてる内にいつの間にか、心が安らいでた。サンドローネのうるさい声が聞こえない今は……こつしてるのがやつぱり、落ち着く時間なんだよね。空気がどこまでも澄み渡つて、私の行きたい場所が一望できて、宇

宙の中のティワットが、ティワットの中のナド・クライが……指で丸をつくったら、その中に家のすべてが綺麗に収まっているのが愛おしくって。深く頭を使わずにぼんやりと考え事をするのにも……ちよいどいいんだ。

家を見ながら、思う——『あの頃も分かった。……「望まないこと」だけは』って。サンドローネはそんな風に、記憶の中で言ってたけれど。頭の中で、反芻するその言葉をうすぼんやりと、考えてた。

……ごめんね。記憶の中で全部、見たよ。ずいぶんと前のことだけど、キミはアルレッキーノに頼み事もしていたし、日記も……書いてたの、横からこっそり読んだよ。本当にごめんね、ズルをしちゃって。きつとこれは、キミの想定範囲外だと思っから、誰にも秘密にしておく。知らないふりをするから、許してね。

もっと、ずっと昔のこと……見たよ。奇械公に言われてた望みに、最期、サンドローネはどう答えを出したのかな。願いなんてないし、他人の願いを叶えてやるつもりだってまったくないってあの時から言ってたのは、本心なんだと想う、けど。

夜空の月に座って居ても、星光の欠片を掴むことは出来ないから。少しだけ月面にクーヴァキを強く込めて、束の間、ティワットに注ぐ月光を強くしてみる。サンドローネが起きて手を伸ばせば届くくらい強く、降り注ぐように。フォンテーヌ、今は夜だね。晴れてるといいな。キミと私の大好きな夜だよ。

……うぬづれかな。私が月の裏側に行ってた間、何を想ってたのか……サンドローネが頑張ってくれた様子を見てたら、流石に分かるよ。キミと私は他人のために身を捧げるようなタイプじゃないって、言ってたけど。キミは私のためにあそこまで動いてくれた。私の言葉を、大切にしてくれたんだよね。私の言ってたわがまま、大切にしてくれたんだよね、サンドローネ。この世界にない場所を作ろうとしてくれて。あの夜に言った「また会いたくなる」に、応えようとしてくれる。その気持が、背中を見てて痛いほど、苦しくなるほど伝わってきた。

だから、余計にわからないんだ。結末なんてない物語を読み終えた後みたいなのに、サンドローネが何を考えてたのか、最期だけが不意に抜け落ちて。『ワタシがいらないとなんにもできないのなんて、知ってるわよ。アナタはいつもそうなんだから』って、いつものサンドローネの声が今にも聞こえてきそうだったのに。死んでしまえば終わり。生きているものだけが、これからの道を決められる。そう言ってたのはキミで。ドットーレの前に飛び出す最期の時までサンドローネは……まるで、ドットーレのもっと先を見てみたい足取りだったのに。サンドローネ……なんで、動いてくれないの？

頬を小さく叩く。分かっている、分かっている。キミは最期まで願いを口に出さなかった。うすぼんやり輪郭を持ち始めた心の中の流星の矛に、言葉で形を与えなかった。あんな状況で、言えるわけなかった。聴かせる相手が違うんだもの。

そして、今こうなっているのは私のせいだよ。きつと、水仙十字結社の本をたくさん読んでたし、なにか思うところがあつて、私が何とかすることを信じてくれてたからなんだよ。私はキミみたいに賢くないから、キミの記憶が読めても考えはわからないけど。それでも、何かヒントを得ていたのはわかるの。それでも、そんな物事は上手くいくわけがなくて。もし私がその場で解決できなかった時の予備のプランで——前からアルレッキーノに頼んでいた、小さな望みに託したんだと思う。

サンドローネは諦めるどころか、自己犠牲どころか、一番難しい『一緒にいる』をやるうって最善の手を尽くしてくれた。身体を張れば上手く間に合わせて対処ができるドットーレなんかよりずっと、ずっと難しい私のわがままを叶える準備をしながら……大好きなサンドローネは、ラビットホールに飛び込んでいったのに。私が何も出来ないせいで、彼女は今も帰ってこない。

サンドローネが私をなんとかしてくれたみたいに、今度は私がサンドローネを何とかしたいといけないのに。サンドローネは最初の一滴を取り出す為の世界式だなんて無理難題を、やってのけたのに。私だって……サンドローネに同じように連れ戻したいって、思うのに。

て、いつもみたいに……優雅に、であってののかな？両手をバタつかせたりもしなくて、ただ両腕に機械の身体だけが感じられて。もつと普段から抱き上げておくんだった。

テイワットの地面を踏みしめて視たほうが余程綺麗な宇宙の星々を眺めながら。サンドローネを感じていたくて、そつと左手の人差し指と中指をびんと伸ばして……へそより少し上にかざす。割れることはもちろんないんだけど、それでもそつと、薄氷を扱うみたいに。身体の中から掬い上げる。ちよつとサンドローネっぽい匂いのする、水風船……しゃぼん玉っていいのかな。あのままサンドローネの一部がこぼれ落ちちゃったら、もう戻ってこない気がして。皆に見られないように咄嗟に、水元素を操るのと同じように丸くして身体の中にしまった、キミの一部。クーヴァキも混ぜて補強してるから私の命が続く限り割れることはないし、いつかの月髓みたいに奪われるつもりもない。ほんととはなんてことない機械油なのかもしれないけど、私にはキミの気配が少しだけ、感じられるよ。クーヴァキには思い出をのせる力があるから形を持ったものに注ぐと、なにかしら感じ取れるものはあるんだと思う。

それから、サンドローネの……なんだか、こうやって見る度に自分のやることが恥ずかしくなってくるねでもキミは私に新しい命と、あの機械の花と、皆の寄せ書きの中の絵だけしか。わがままで欲張りな私を満たせるくらいのキミを感じられるものは、何も残してくれなかったんだもの。普段キミは私に沢山のものを与えてくれてるんだから、キミがいてくれないと何を貰ってももの足りないよ。帰ってきたらたくさん罵られたって、悪態をつかたつていいから、これくらい許してほしい——なんて、想いながら。真ん中の空洞にきらめく亜麻色の髪束を、そつと取り出す。もちろん油で濡れてなんかないし、香りもそれと混ざってない。こんなズルくらいクーヴァキがあれば簡単にできるけど……。ほんととはキミに寄りかかって、直接キミの香りに包まれていたいな。

暖簾に腕押し……元素力を使わずに純水を手のひらに留めたままでいたい……それと変わらなかったなって。銀月の庭でキミにクーヴァキを色んなやり方で毎日注いでた時、ただ底の抜けた容器に思い出だけを注いでる感覚がしてた。名前をたくさん呼んだけど……それを合わせても、まだ足りなかった。土台になる何かが足りない

ただ『恋人』と

感覚がずっと、頭の後ろで朝もやみたいに立ち込めてた。何が足りないのかわからないのが悔しくて、晴れることはなかった。挫けそうになるたびにね、「しかたないわね。無理ならメソメソせずに待ってなさい。それくらいアナタにもできるでしょう？」って、言われてる気がして。お遊びでならいつだって勝てるのに……ほんとに大事などこでは私、サンドローネに敵わないんだね。私だって、フォンテーヌに行っちゃう前に……自分の力でサンドローネを起こしたかった。

「姿が変わったからって、違うものになるわけじゃないと思う？もし……この先の『真実』が私の想像と違っても」

一度答えを出した問いをもう一度、虚空に向かって問いかけてみる。私が上手くやれなかったせいでもし、サンドローネが上手く帰ってこれなかったら。それを想像すると、怖くなる。

「……いつだって、遅くない」

言い聞かせるように口ずさむ。この月面の上で。旅人の宇宙船の上にながらだけど。……私には、亜麻色の糸が、この宇宙で一番輝いてるように見えた。そっと鼻先に寄せると、一緒にいた時と変わらない花の香りがした。サンドローネの部屋にはいつも花が大切に育てられていて、そういうところも大好きだった。キミは自分のことを、渡してくれた調度品になぞらえて「香りを失った花」だなんて表現してたけれど……そんなこと、ないのに。確かにキミ自身はいつだって同じ香りでは、なかったよ？ でも、いつだって……きつとフォンテーヌの、花の香りがしてた。分かっている。キミの言いたいことは分かっているよ。バラはバラの名でなくとも……その本質は、変わらない。香りを失った花は……色んな花の香りをまとったとしても、本質は変わらないもんね。機械の花は夜になると明るく温かい光を放つ、それはどんな香りになったって、永遠に変わらない。

そうだ、月面にいっぱい機械の花を植えようかな、今度。キミを驚かせたい。キミに貰った花はこんなに沢山育ったんだよって、伝えたい。そしてきっと青い瞳の彼女が傍にいてその景色を目に映してくれたら、ただそれだけで。ここから見上げる景色以上に煌めいているんだろうなって、思う。努力して何かを得るのはこんなに素敵なことなんだって、今の私はもう、気付けたから。だから、いつだって、遅くない。私は前へ進みながら……キミの瞳に月面一面の花畑を映す未来に、期待してるんだから。

手にとって揺すってみるけど……紅茶は、正直言ってもどれも似たものに思えて、何がなんだか分からなかった元素視覚とクローヴァキで覗いてみるのも、味の判断材料にはならないみたい。どれが私の好きなやつだったのかな……。サンドローネは本当に賢いんだね、こんなに種類があるのに皆の好みを覚えて、適切な淹れ方をするんだから。なくなっても、きつとおなじものは……フォンテーヌとかにあるんだよね？ 近々、買いに行けるといいな。

私が紅茶の準備をし始めた時に口ずさんでいたからかな。月霊達がホワイトベリーとソマルの実、とか。ヴィンテル草と宿影花、とか。色々材料を持ってきたみたい。私が前にフラワーベリーキャンディ……ムーンライトミラージュを作ったあつたから、覚えてたんだね。見てみたらソマルの実も……そこまで渋くないやつがいくつかちゃんとあつたし、ちゃんと美味しく作れそう。サンドローネがいつも出してくれる紅茶の味を舌先に思い浮かべながら……私の作ったキャンディの味も想像して、重ねてみる。今日は楽しいお茶会ができそうだね。そうと決まればさっそく、水元素の力とクローヴァキと素材を混ぜ合わせながら、今日の楽しいひとときの仲間たちを、ころん、ころんって。暇な時に月落銀を作って遊ぶみたいに、手のひらで転がして、用意した食器の上に落としていく。今日は誰かにあげるわけじゃないから、飾りは用意しなくて、適当でいいかな。美味しければそれで満足だから。

熱々のポットにとりあえず選んでみた紅茶を用意して、地面に座る。うん……ちょっとだけ、カーペットが欲しいかも。サンドローネの私室に敷いてあつたやつ、綺麗で滑らかで好きだつたんだよね。

「香り……うん、ちゃんとサンドローネが昔淹れてくれたことがあるやつだ」

色々な種類の紅茶を淹れてくれるから普段淹れてくれるやつとは違うけど、でも、ほんのり香るのは間違いない。嗅いだことのある優しい感じがして、鼻先がくすぐったくなってくる。サンドローネを感じられる気がして、無性に嬉しかった。そう思うと、ちょっと熱く淹れすぎたかなって思いながらカップを握ってる指のひらも……

「……サンドローネ。紅茶、おいしいね」

言いたかった言葉だけを口から出してしまつて、開けていた目を瞑る。今開けてると、目が乾いちゃうな。ただでさえ月で沢山サンドローネを見てきたから、最近サンドローネばかり見てるから、目が疲れちゃつてるのになんかそんなんで何かをこぼさないように、今は瞑っておこう。

近くでクレーヴァキが揺らいた。月霊達がそつと肩の辺りに近付いてきて、私の残したキャンディーを持ってくるのが伝わってくる。かわいい私の大事な家族達。こないだ食べさせてあげた時に私が嬉しくって笑顔だったから、きっと「美味しい」って言うとなが喜んでくれると思つてるんだね。

「ありがとう」

ちゃんと伝えてあげながら、月霊達でもキャンディを食べやすいように元素になるまで溶かしてあげる。すごく美味しそうに食べてくれるのが……たしかに、嬉しくつて。家族のその氣持が嬉しくつて、仕方がなくなつて。愛おしくつて。

でも、私だけが何も美味しく思えなかったのが……悲しかった。きっとサンドローネがここにいたら、私にまた「アナタがやるとそうなると思つてたわよ」なんて言いながら、私の作つたキャンディをひとつ食べた後……ちよつとだけ優しく褒めてくれた後に、お茶菓子になんかならないキャンディにも合う、私好みの紅茶を淹れてくれてたんだろうなつて想像がついちゃつて。こないだ飲んだ紅茶は冷めてたから美味しくなかったわけじゃないんだなつて、氣付いちゃつて。うん……素材の香りを感じる味はもと好きだから、きっと紅茶自体は好きなんだけどね。でも……このひりひりする贅沢な舌先は、キミの味に慣れちゃつてみたい。

氣持が優れないから胃の調子が少し、悪くなつてきて。少しだけ、えずきそうになる。それはもちろん、当たり前で。いつだってキミが居ない事を忘れないように、キミを感じられるように、身体の内中の辺りにしま

憶の意味がなんとなく分かってしまつて、海辺に近付いてから……海面を見る前に、やめた。見たくないものじゃないのに、なんでなんだろうね。丸く月光が映る場所は目を瞑っていたって、自分の手足とかわからないように分かるから。こないだ、キミの私物をこっそりもらいに行った時はね。このままじゃ何もかもなくなっちゃうって必死だったから散歩の気分じゃなかったし、はなから転移でお邪魔したから気付けなかったけれど。

「ひとつ……ふたつ……みつつ、よつつ。うん、たくさんある」

実験設計局はそこそこ広いけれど、すぐに見つかった。開栓されてるものは大抵、だれかが口をつけた元素の跡が残ってるから見分けやすくて、まだ飲んでないものはたつぷり入ってまともに置いてあるから、反応も大きくて見つけやすい。経費精算……は、必要なかな。サンドローネがいたら任せておけたんだけどな。この件はアルレッキーノに手紙を……うん、それだと私が変わることとしてるって思われちゃう。サンドローネのことでならちよつとくらい悪い子になつても、別にいいよね？ 普段は大人しくしてるから。

ブラーミアバダー

少し三月の力を込めると、手元には目当ての「炎水」の入った瓶が握られている。一本、貰っちゃった。たくさんある所からとったから、一つなくなつても気付かれないはず。

「もう月霊達は帰ったかな……さすがにこんなところ、家族にも見せたくないな」

銀月の庭の入口を塞いでた大きな岩は……どかしたけど。家に迎えたい親しい友人はたくさんできた、けど。人と触れ合うようになって距離が近くなつたからこそ、なんだろう、自分の輪郭が分かつたような気がする。今は一人で想ってたい気持ち、少しずつ形になっていつてる気がね、するんだ。旅人が気分転換で壺の住まいに誘ってくれる事が時々あるけれど……。

「……サンドローネ。私、キミと家族になりたい」

今私がしようと思いついてることは、簡単で。ちよつとした一人部屋をね、銀月の庭に作ろうってだけなんだけれど。そこに入っていいなって思えるのは、キミだけだよ。だって大事な家族や友達に隠したい想いなんて、キミの事以外ないんだもん。きつとそれは、私がキミのことを特別に思ってるってことだと、思う。

「家族と一緒に過ごす家には、二人の思い出が溢れてないといけないんだ。キミが帰ってきてから揃えるのもいいけど、帰ってくるまで、寂しいよ。ねえサンドローネ。今、ティーセットしかないんだよ？ サンドローネのベッドが、恋しい。サンドローネの育てた花の香りが、恋しい。そうだ……今日はカーペットが恋しかったな。いつもキミがスネージナヤで平等な関係を作ってくれた時に、近くにいてくれたから」

キミの部屋にあったものではないんだけど。ひよつとしたただのまやかしで、自分の心を慰めるくらいにしかないのかもしれないけれど。秘密の地下室に、揃えようと思う。一つこれからの目標がきちちゃつたね。

「……ん？」

月霊達の前でお酒を飲むだなんて恥ずかしいから、もうちよつとだけ待ってから帰ろうかなって思つて……暇つぶしに、実験設計局の中を元素視覚で視てただけ。うん、自分の居た場所のことをこういうものもなんだけれど。結構ゆるいつていうか。自由だよ。別にフアデュイは、女皇様の目的のために急進派として動いてるだけで……やり方は各々に任せられてるから。そこにサンドローネがいたり……アルレッキーノがいたり、ロザリンが、いたり。「隊長」みたいな人がいて、「博士」みたいな人がいたり。もちろん小心者の小悪党も。そして——ああいう、仕事をさぼっちゃいたい人も、沢山いる。

「笑えちゃうね。ナド・クライの月光が降り注ぐ場所でそんな事、しないほうがいいのに」

仕事中にお酒を飲んだのかな？なんかいい具合に酔いが回った男の人と女の人が、建物の影に入っていくのが目を瞑っていても「視」えて。うん、私でもね、さすがに知ってるよ。「恋人」同士がする行為だよ。人間の番の、交尾。動物たちがしてるのは数え切れないくらい視てきたし、五百年もあれば私の感知できる範囲でそういう事が行われてる事は……人間同士でも幾度も、あって。別に今までは特段そんなこと、考える必要なかったから。知識としては知ってるだけで興味はなかったんだ。生殖を行うのは、短い生命が自分の生きた証を残していく本能で……なんて理屈はもちろん知ってるけれど、私にとっては意識する機会もないもので。

銃火器って言うより、爆弾の化学薬品の元素と、医療用の薬品の匂いが染み付いてる二人だ。擲弾兵と衛生兵かな。危ない仕事をよく任せられる前線の兵士と、急ごしらえの兵士。ナド・クライ全土がそうだけど、クーヴアキ実験設計局だって変わらない。皆、生活を取り戻そうって頑張ってる。今はきっと普段は前線にいく人達も一緒に実験設計局の復興活動をしてるから、ちよびつとの余裕があるんだね。

「……あつ」

ベルトを、すべらせるようにゆるめて。上着を、雪を払うように脱がせて。口づけを——心臓に触れるようにしながら。私がサンドローネに言ったことのある言葉がこえました。

『大好きだよ……愛してる』

……今、ホワイトベリーをかじってたら、咳き込んで手から落としたと思う。手から宙に離れた炎水をなんとか、クーヴアキで下まで落ちないように浮かせた所。ほんの少しだけ、耳が熱くなるのがわかる。なんてかな

ても困るけど、いないことが、くるしい。私何を考えてるんだろう、今私がするべきことは、こんなことじゃないのに。サンドローネを取り戻すために気持ちを強く持つて言っても、考えるべきなのは少なくともこんなことじゃ……。

「……」

それはちよつとした、好奇心で。実験設計局の誰かのベッドの下に置いてあった、暇つぶしのための俗な恋愛小説が……気付けば、私の手元にあった。月霊達が帰るまで、時間を潰すためだから。そんな、言い訳だつて分かったことを誰に弁解するでもなく、思いながら。本にうつすら記されたインクの元素を辿つて、目を瞑つたまま、文字を視ていく。今までなら暗いまぶたの裏に映るただの文字の羅列で、その言葉の意味するところに特に思うところもなくつて。なのに今は……想像する内容が翼を持ったみたいに自由に羽ばたいていて、私の耳元に誘惑をしてくる。なだらかで無機質な紙面なんかじゃなくつて、そこに描かれる人の心には血が通つてるように感じられて、愛する人に触れて求める心情が……痛いほど、想像できてしまう。欲望で溢れた流水に、堕ちた羽をひとひら浮かべたら空を自由に飛ぶよりも難しくて、手繰り寄せられるように流されて、ふとした瞬間にいつでも溺れてしまいそう。このままじゃ傍流に逸れて、泥濘に……。

「ぬかるみに、おぼれちゃう……っ」

最悪。サンドローネは私の為に命を懸けてくれた。なのに私は彼女を起こしもしないまま、よこしまなこと、ばかり考えてしまつて。本当に、最低。もういいよね、早く家に、帰ろう。

花も置いておこうと思う。できたばかりなのに既にほんのり思い出が詰まって、少し気持ちが上向くを感じてる。そうだね、カーペット……ベッド、お花、テーブル。あと、椅子がほしいな。それだけあればサンドローネを感じられるし、返ってきた時にすぐこの部屋に住んでもらえる。きっとフォンテーヌのものだから、茶葉も買えるしお花も買って帰ってこれる。きつと、きつと……。

「余計なことばかり、頭に浮かんじゃうね」

サンドローネから聞いたよ。フォンテーヌの人は香水をよく付けて染みつけてるんだって。私は目を瞑ってる分他が敏感だから、そんなのむせちゃうよって言ってたんだけど。さっき読んだ小説の描写が頭に残っちゃって……私からそういう香りが漂ってたら、サンドローネは、私みたいに心臓が早くなってくれるのかなって、考えたりしちゃう。髪を綺麗に洗って、身体の間々まで清めて流して、少しでもお化粧をして……私はもう、「少女」じゃないんだって、意識してほしい。コロンビーナ・ハイボセレニアは、キミのことが好きな一人の女性なんだって、意識してほしい。

「……」

頭の中で想像しただけで、あまりにも今までの自分とかけ離れていて。でも私をこんな風にしちゃったのは、私を大人に新生させたのは……キミなんだよ？ キミがいらないから私、自分でなんだってできるようにならないといけなくって。大人にならないといけないんだよ。帰ってくるまで、少しでもしつかりしてないとなら。ほんとなら、今すぐここに来てほしい。もし今キミが、ブロンニアの手に乗って銀月の庭の入口に立って、私の名前を呼んでくれたら……銀月の庭の中に入ってきて、私のいるこの部屋を見つけてくれたらと思うと、思わず周りの鳥が全部勢いよく飛び出しちゃうくらい心臓が穏やかじゃないもの。きつと付け焼き刃の知識の私なんかよりもキミの方が詳しいだろうから……私に早く、教えてほしい。

「……キミは、誰かとそういう事、したいって思うことがあったのかな」

ないよ。今まで視てきた記憶のキミを思っただけ、自分の期待なのか、もう……わかんないよ。心のなかで即答したけれど、答えはもちろん、わからない。サンドローネ、キミと話がしたい……。

いきなりお酒を飲むと悪酔いしちゃうのかなと思って、先に少し胃を動かしておこうと思う。クリスプ・ブレッドと燻製フィッシュステークを用意しておいたの。これは……うん、経費精算の練習は今度から頑張るよ。あれ、でも私はもうファデュイのファトウスじゃないから、サンドローネがいないと経費精算してもらえないのかな……。ちょっと、友だちに聞いて考えないとだね。自分一人でも買えるように練習しないと。

あんまり良いのをもらうと可哀想かなって思ったんだけど、これの代わりに月落銀を置いてきたから……多分、代価にはなってるはず。香りがよかったから、存在感が遠くからでも伝わってきちゃってて。

こういうのは素朴な味わいっていうんだよね？ たしか。嗅覚も味覚も良いほうだからそのままの食材でも最大限に楽しめてる自覚はあって。時々ね、機会があれば食べてたよ、ナド・クライで生きてるんだし。三日月のロッキングチェアを出して座りながら、香りを嗅いでみる。ライ麦のいい匂い。麦畑にいて深呼吸をしたまま家に帰ってきたのと変わらない香りがそのまま頭を抜けるみたいに広がって行って、心地良い。種の素朴な酸味がかじらないうちから想像できちゃう。

「うん……美味しい」

かじりつくと、からつとした生地が……上手に作られてるから硬すぎない、程よい食感と一緒に、聴覚まで

喜ばせてくれる。よく噛んで食べるから、そしゃくする度に……麦の育ったティワットの暖かさを感じられるみたいで、すこしだけ口元がほころぶ。私の情緒は最近ずっと上がったり下がったりしてんだけど、少なくとも美味しいご飯を食べたり、親しい友人と過ごす時間は……気持ちいが安らぐ。けれど、安らぎの中でもサンドローネを忘れることは決してしたくないから、そういう時はじんわりと身体の中で彼女を感じる。今も体の中心で、ちょっとしたいびつな苦しさが確かにあって、サンドローネが帰ってくるまで代わりに夕飯時の悪態をついてくれるみたい。皆の中でもサンドローネを感じてられるのが、今の私の心の支えだから。そしてこのブレットはきつと、消化にも良い。フィッシュステークは、炎水と一緒に食べようと思う。

外は……さっきまで降ってなかったのに、寄せた雲、強く力を掛けすぎちゃった……ちょっとした雨になっちゃってる。一層普段より地下にいても、やっぱり鍵盤に指をはしらせてるみたいなテンポを刻みながら雨粒が屋根の上でじゃれついているのが聴こえてきた。

……雨の中で一緒に過ごした記憶を思い出す。サンドローネが一人じゃないように、なんて。干渉は当然できないけど。プロンニアも連れないで……サンドローネが人生で初めて、一人になった日。せめて何もできなくても、私だけでも傍にいてあげたくて。雨がやんで月が出てみずと、付き添ってた。そつと頬に口付けをしても指に手を絡ませても……気付いてくれなかったのは、寂しかったけど。

雨滴の音色に耳を傾けながら、炎水のボトルを上に掲げて見つめる。飲む人の気持ちがわかるかも……なんて思いながら持ってきたけど、正直言っであんまり、分かりたくないな。今になって家を出た時の弱気と自分の行動力に少しだけ、後悔してきた。どうせならそんな嫌な呑み方じゃなくて、前向きに飲みたい。

ちょっとした日常会話だけれど、奇械公がキミに話してるの、私も聞いたんだよ。彼と……マリアンのお父さんが、よく携帯用の小型水筒、スキットルを持ってたって。前から別に好ましく思ってたわけじゃないけど、それが悲しくてもっと嫌いになっちゃったな、強いお酒。スキットルは……忘却の容器だもの。漆黒のラビットホールの底で蜘蛛の糸を掴むような、縋り。家族と一緒にいられない人が、一人自分の使命と立ち向かうために

せな時に飲みたいから、一人で飲むのは今日で最後。私はクーヴァキで記憶に強い女神だもの。飲んだ所で忘れない。それに、人によって酔い方なんて違うんだろうし。むしろ、この身体の中の君の感覚をもっと感じ取るために、キミを敏感に感じ取れるようになる為に、飲むから。少しだけ震える手で開栓する。

「大好きだよ、サンドローネ」

両手で握った瓶の先を口につけて、花に水を少しこぼすように、一口だけ飲む。よく冷えてるから喉元を通っていく感覚に、きゅっとして思わず目を開きそうになっちゃう。

「サンドローネ、私……」

ほんととはキミに、してほしかった。きつと仲良しの罵りあいの一つだと思ってたから。サンドローネはそういうのが好きだから言ってるのかなって素直に思ってたから、お互いにやりたかった。キミにされたかったの。まんざらでもなかったんだよ？　なのに、先に取られちゃった、何もかも。

「こんな事で不愉快になってる私が、一番おかしいの、分かってるよ……」

自分の手で殺したはずなのに、今になって思えば手応えがあったかって言われるとなんとも言えないけれど、それでも。何も気持ち晴れない。だって私にとっただけでも早くやる事を終えて、キミを見たかっただけで、他のことなんてどうでも良かったから。

後になってからだよ。一つの行為のキミの初めてが奪われたことも、その汚れた経験が「博士」に植え付けられてしまったことで、もう私がそれをできなくされてることも。どちらも知らずに行場のない手のひらだけが残ってることを、後に、後になって知らされて。キミを連れ戻せもしないのに私はなんて強欲なのかな、本当に。

も。呑みながら。全部もつと、実感として知リたかつた。言葉を尽くして愛しさを思い浮かべられるように、な
りたかつた。きつとこのままじゃ、私、キミの知つてた少女でいられなくなっちゃう。

続きは書き上げますので完全版をお待ち下さい。進捗、更新告知に関してはサイト及びSNSで行います